

[論文]

## 世俗世界での「社会的アガペー（愛）」

—— アメリカの資本主義への倫理的批判 ——

デイビッド・マーチー著

翻訳者：野村 信，原田 浩司，吉田 新

---

45年前、私は基督教の歴史と神学の若い学生であったが、私が抱いた基督教信仰と、私の周囲の基督教者と非基督教者との間の「世俗」生活に明らかに支配する資本主義とを知覚すると、両者の不調和な繋がりによって悩まされた。たとえば、誰も資本主義が基督教の信仰の教義であるとは公言しないまでも、私は資本主義が長らく基督教思想と西洋の基督教の方向性に影響し、基督教の用語を資本主義に親密な仕方で再解釈していることをすぐに感じた。「自由と貪欲」という基督教の概念は、その原初の聖書的な意味からみれば失望させられるものであった。基督教神学の世俗化が始まると、「自由」は、人々の、抑圧からの精神的肉体的逃避という点から記述される言葉として描くことがますます無くなった。むしろ、「自由」は、奇妙なエリートが使い、濫用もする世界の特別な特権として黙認するものになった。すなわち「自由」は、制約のない経済と財政「市場」を確立するための広がりとして言及されるようになった。さらに、「貪欲」という、醜悪な罪は、その手の言語的洗礼を受けた。それは今や、「商売気」という、より倫理的に無色な、あだ名として楽しまれている。

ルカによる福音書は、イエスの「愚かな金持ちのたとえ」を書き留めている。このたとえ話は、資本主義を真正面から非難したものであるが、教会は過去何年もの間それを見逃ごしにした。そこでその箇所を確認する（ルカ 12 章 13-21 節）。

群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」

イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないから

である。」

それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。』「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

この箇所が示すように、イエスは、我々に貪欲に対して警戒するように命じる。しかしながら、「資本主義」は、貪欲を「制度化」し、それを一種の世俗的な美德へ変容させる。プロのフットボールの Vince Lombardi が勝利の時に語った有名な言葉で言えば、資本主義において、「貪欲は、もっとも重要だというわけではない。それは唯一のものなのである」と。

「資本主義」は、その名が示すとおり「資本」に、「資本を産み出す」ために、究極の価値を置く。資本主義は、専門用語の「資本」から生じる、基本的には「動き (ism)」なのである。それを一つの動き、あるいは信頼の組織と考える時に、資本主義は、人間社会において、より資本主義的なものが常により資本主義的でないものよりも優るという第一の、最も確かな確信を得る。これはすべての資本家について言えることではないが、資本主義の宗教への、道徳への、倫理への関心は、宗教、道徳、倫理が資本の蓄積に貢献するという範囲内に限定されている。「社会主義」という言葉の主要な目的が改革された社会であると示唆されるのと同様に、「資本主義」という言葉の主要な目的は、改革された資本の蓄積、すなわち、「資本の持続的拡大」、あるいはより一般的に「成長」という点にある。

資本が増加する時、資本主義は成功する。すなわち、資本主義の目標（資本の蓄積）が達成される。資本主義は、良い意図に荣誉を帰すことはない。それは特別な道徳価値に関与しない。それ自体は勤労に報いもしない。資本主義の唱道者たちは、資本主義の理論に沿った結果は、かなり正当なものであるとしばしば指摘している。そのような指摘は、やっかいにも、素朴なものであるが（明白に皮肉なものでなければ）、非道徳的な掘り出し物を倫理的な政策決定と混同しているのである。アンドリュー・レヴィンが指摘するように、私たちの現代社会において、「超大金持ちは、ひよんなことから、あるいは生まれにより、さらに大金持ちになる。彼らは巨万の富を生む資源を所有している」と。ごく簡単に言え

ば、資本主義は、どのようなやり方でもさらに蓄積は増幅され、資本の蓄積という報酬を得る。しかしイエスは、このような際限のない富の追及を（資本の飽くなき蓄積を）「貪欲」と語った。イエスとマルクスとでは歴史的な相違があるが、イエスの論じるところは、ある点でカール・マルクスの論じるところと似ている。イエスは、貪欲のゆえに、神が彼らに与える実りある生命の豊かさから遠ざかり、富を蓄える人々を愚かであると語っている。もちろんマルクスも、明確にこの物質的な広がり言及しており、生産物の資本主義的支配によって、人々を労働と人間関係から疎外させる社会における商品化の悪化の影響を語った。しかし重要なことは、イエスとマルクスは共に、資本主義の成功の悲劇的結果に焦点を当てている。すなわち、個人的社会的な生活における歴史的な精神的非人間化である。

広い歴史的視点から見れば、西洋のキリスト教は、商品の飽くなき個人的蓄積という、資本主義の自己追及促進の犠牲者になりさがった。それはマルクスによって19世紀に予告されていた問題であった。マックス・ヴェーバー他が、指摘したように、人生における成功は、ますます精神的に薄くなり、ますます経済的に増大することになった。ミカエル・ウェルトンは、最新刊の論文、「資本主義は西洋の支配的な宗教である」において、過去には、経済的な成功は、神が人々を祝福するという表れとして見られたが、今では、私たちの生活にとって、経済的な繁栄が神に取って代わったと言う。西洋の神は、ウェルトンの言葉で、「市場—すべての希望の源」という神になり、抑圧者たちを解放するというモーセの神ではなくなった。文教大学のデイビッド・R・ロイが指摘するように、18世紀の道徳的哲学者であり、自由経済の理論の父なるアダム・スミスでさえ、市場の危険と社会の一般価値を壊す傾向性、すなわち、私たちの誰をも喰す過剰を抑制するために必要な価値を壊す傾向性を語っていたのである。

広範に亘って、西洋の個人主義的宗教思想の傾向は、一般に道徳的責任の減少を引き起こしやすく、個人の内面的な領域を超えて存在する世俗世界に向かう。しかし歴史的、聖書的に、概してキリスト教の歴史解説は個人的なものではない。聖書によれば、キリスト教信仰は、個人の経験で終わるものではない。私は、決してキリスト者の経験と神学における個人的な神との関係の重要性を否定しているわけではないが、聖書にある神の命令は、元来きわめて広いものであると言わなければならない。広く社会を癒すという重要な役割を実行することに失敗した西洋の教会の核心は、すべてのキリスト者の経験の心にある、アガペーという社会的次元を評価することに失敗したということにある。アガペーという愛は、神の人類に対する恵みとして示され、いかにキリストのように生きるかに関する示唆において重要な役割を担ってきた。こういう理由で、キリスト者は、ある意味で、アガ

ペーを、自分自身の特別の職分として考える傾向があった。だが、信仰と働きという両者の観点から、アガペーは、概念的にも、実践的にも大変豊かなものであり、それを広く適用するにはキリスト者と非キリスト者の生活の両者にとって、力強い影響をもつ可能性を秘めている。確かに、アガペーは、力強い中心、純粋な軸として十分論じることができ、力ある愛の霊的現実とその幸いに与る人々の生活に受肉するものを結びつける実践的倫理を動機付ける知恵なのである。社会学的な観点から言えば、アガペーは、人間どうしの平等を達成する原初的推進力なのである。(これはイエスの「自分のように隣人を愛しなさい」と、旧約聖書の「ヨベルの年」などの社会实践の命令において明確に見られるものである)。

アガペーは、ある意味で、掛け橋である。それは、多くのことに同意できない人々のいる世界において、私たちの個人的な宗教感情と社会的責任の間を結ぶ掛け橋である。アガペーは、神と人間両者の行動の鍵となる要素である特別に豊かな現実である。カール・バルトが指摘したことで有名であるが、アガペーは、もう一人へ、あるいは他者へ向かう、活動的、愛を土台とした行為である。しかし、言葉の多様な用法を見ると、特に新約聖書において、アガペーは、一般の人へ、時に病んでいる人々に焦点をあてた関心へ向かう言葉であることに気付く。アガペーは広範であり、包括的である。神は「世界」を愛される。イエスは同僚に、しかも「汝の敵」を愛するように命じられる。アガペーは、義務論的 (deontological) である。その必要性も、実行も、愛する人の、愛される人の感情に左右されない。その理由は大切である。すなわち、西洋のキリスト教は (個人の権利に関して勝利者となった西洋の自由主義であるが)、個人に伝道することで個人の問題に、個人の権利に、地域の個人的関係の発展 (すなわち教会) に焦点をあて、広い社会的なグループを無視することを正当化するという自由を許容する点にある。このように、西洋のキリスト教は、個人がイエス・キリストに従えば、社会的行動への刺激を内包するものと考えられる。彼らが富裕者の税金を削減すれば、裕福者は当然低所得者により多くを提供し、より多くの仕事を提供することで助けることになると思える保守的な政治家によって、ばかげた精神的過ちを犯す。

アガペーの行動的実践的な性質は、キリスト教の信仰を個人的なものに限定することをよしとしない。すなわち、主イエスが語られた「隣人」とか「敵」といった人々を排除しない。これに対して、アガペーは思慮深い。それは賢く適用される。人はそれを「探究を土台とした愛」と呼べるかもしれな。たとえば、アガペーは、我々が経済的な統計を真剣に用いることを要求する。我々は我々の中の貧しい人々を探すことを目的としてそれを行う。この人々は疎外され、差別されて、経済的活動に参加できない人々である。私は、「社

会的アガペー」として、限定的に不正と迫害を矯正するために、この倫理的アガペーに裏付けられた動機に言及したい。さらに「社会的アガペー」は、世俗的宗教的に妥当するものをもつとして見られるべきである。私は最近一般社会の何人もの人々の著作によって刺激されているが、彼らは、この「社会的アガペー理解」を、たとえばアメリカのような経済的なシステムをもった国々を成熟した資本主義が略奪しつつあるという深刻な研究によって語る。この著者たちは、アガペーその用語に触れていないが、彼らの著作に貫かれる「社会的アガペー」の理解は、彼らの実証的な発見の背後にある研究と統計を豊かなものにしていく。彼らは、神学思想の範疇に限定されない一般的倫理的目的に効果的に取り組んでいることを示す。特に、アガペーの向かう焦点の柔軟さ、たとえば、その広い、個人の枠を超えた集団へ向かう柔軟さは、資本主義のような型にはめられない、広い動きのような、難しい議論に役立つであろう。あるいは、法的責任を明白に追及される人がいない、社会的な不均衡や民族虐殺のような悲劇的社会の現実を探究することに役立つ。

記述したように、「社会的アガペー」は、必ずしも「良い感情」によって起こされるものではない。良い感情は、「社会的アガペー」の影響を明らかに示す行動を伴うか伴わないかではなく、「社会的アガペー」自体は内的な感情ではない。むしろ、直接的、倫理的に生じる、社会的政治的指向であり、すべての人々に十分な生活状態を造り出すことを求める平等の政策であり、可能な限り、社会的弱者への関心を喚起し、社会的な強者の増長を抑えるものである。そのような政策は、注意深い、実証的検分と実施を要求する。しかしながら、彼らは、「社会的アガペー」の理解から道徳的倫理的推進力を受領するであろう。それは、すべての人々が成長できる平等社会の完成を目指して、研究者や政策遂行者らの心に彼らのすべての努力を抱かせ続ける。

Gary Leech は、彼の西洋の資本主義に対する批判が、この「社会的アガペー」の理解に満ちている現代の著者である。Leech の *Capitalism : A Structural Genocide* (『人文学と神学』の前号で書評した) は、西洋の、新自由経済のモデルに対する倫理的経済的評論を出版した、最も広範なグループ中のまさに一人である。そのモデルとは、再配分によって引き起こされる人的被害が生じるにも拘わらず、一部の人を富ませるように国家の富を再配分する金権政治的企ての集まりを露わにするモデルである。John Bellamy Foster, István Mészáros, Paul Craig Roberts, Samir Amin, and Richard D. Wolff といった批評家たちに続いて、Leech は、自身の批評において「社会的アガペー」の顕著な理解を明らかにする。彼は、社会政策がもはや自分たちの心に良きものをもたらさない西洋国家の壊れた経済的財政的の下部構造を露わにし、さらに、彼らが豊かでない世界の現在や未来になんどの関心も抱かな



いことを示す。

Leech の著作は、安定した社会を維持し、その社会の人びとが人間的な必要を得ることへ資本主義が論理的、歴史的にも失敗したと批判している。しかし社会的解決に関する Leech の批判も、彼の提案も統計学上のモデルや描写の価値判断に影響されない声明を提供する企てではない。むしろ、「社会的アガペー」の精神で、著者は、人間の経験に関する相互関係の経済的統計の必要を付随的に認めることなく、そのような経済的現実がせいぜい意味をなさず、最悪なら、豊かな人々から冷たく、狡猾にも貧しい人々を攻撃することがあることを忘れることなく、経済的現実を率直に認めることを企てている。実際、これらは米国を西洋の内の発展した国々のすべての最も不公平な国とするような攻撃である。他の近年の人道的な意味を経済的なデータと形式に与える「社会的アガペー」の潜在性の例は、フランスの経済学者、トーマス・ピケティの  $r > g$  によって産み出された国際的な現象である。 $r$  は資本の平均的還元率であり、 $g$  は経済的成長を意味する簡単な形式である。この公式を発展したものと、『21世紀の資本』と題する最近刊において、ピケティは、社会的不平等の理由について、公然と深刻な議論と倫理的な批判を開始した。

Leech の主眼としてしているところは、資本主義に根をはる「構造的な暴力」である。彼はもっぱらある種の悪しき行動の背後にある個人（ら）に対する探究が、私たちが生きて働く中での組織に広がるより内包的な悪に私たちを盲目にすると指摘している。たとえば、人々が集団殺戮的行動をもっぱらある人々の悪しき行動にあると思うと、暴力的構造によるさらに広範な人間の廃墟を見落とすことになる。その暴力的構造とは、たとえ人が人間の大量殺戮の原因を特定の人びとの決断と行動に帰すことができなくても、世界中に夥しい死を生んでしまうという構造である。人が資本主義者のエリートたちの破壊的な行動の原因を「貪欲」や「支配欲」のような単純な動機に単純化できないとしても、構造的な暴力は、資本主義に支配的な枠組みの一部である。

本論の関心により適切に言えば、暴力は「資本主義の内的な論理」を内にはらんでいる。資本主義は、持続的成長を、すなわち、止むことのない富の蓄積（拡大）を要求する。しかし、この連続的成長は、究極的に社会的環境的資源の破壊による活動に依存している。John Galtung は暴力を広く「人間生活の悪化」として表現した。Leech はこの点を拡大して、構造的な暴力は、「社会的構造によって引き起こされた」人々の基本的必要性の搾取であると唆する。確かに、Galtung が詳細に説明するように、社会経済的な構造に組み込まれた暴力は、「構造的な大量殺戮」のための不均衡な力と未来的可能性を産み出す。構造的暴力に関する責任の中心がたやすく曖昧にされるのを見極めることは難しいことでは

ない。国際法においても個人の行動に焦点を当てるので、組織的な犯罪を追及することにしにくる。要するに、組織的な暴力に影響された人間の、大きな集団に関心（社会的アガペーの理解に備わる関心）がなければ、組織的暴力は非倫理的、あるいは不可避のものとして見られるからである。どの場合にも、そのような暴力からの被害に対して解決の見込みはない。

Galtung は、構造的暴力の狡猾な匿名性を言う。Slavoj Žižek は、同様に狡猾な匿名性を、社会的イデオロギー的暴力よりもむしろ、より「異様な」ものとして語る。にも拘らず、死が資本の論理に従って起きる意図的な行為の結果である時に、資本主義の「構造的暴力」は、「構造的大虐殺」として合法的に見られる。ある程度の個人化は、資本の理論のような概念を評価する時には妥当する。なぜなら、たとえ非個人化であろうと、その組織的な要請は、特に人間の生活と環境に深刻な結果を残す。たとえば、Ludwig von Mises が論じたように、資本主義的組織においては、貧しい人々自身が資本に欠けているので、彼らはほとんど、あるいはわずかにしか声を上げない。彼らは貧しいが故に、彼らを不毛にする組織の中では票をもたない。Karl Polanyi が説明するように、機能的な経済においては、資本の理論は、他のものにまさって先んじる。人は、世俗的な偶像礼拝に匹敵するものとしてこの全てを包括する統制を誤って見るというぐらいでは済まされない。Leech がさらに説明しているが、リベラルな民主主義の旗印においてさえ、差別と不平等が彼らの醜い頭を育てる。「万人にとっての個人の権利と財産の権利」という勝利にも拘わらず、これらの権利は実際、万人に自由を保証しない。代わりに、個人権と財産権は、金権政治の道具—富裕者層が彼らの下にいる人々を搾取できることによる不平等の状態を下支えする道具—となる。要するに、資本主義の連続的生産拡大の力は不平等の増大を促し、より平等を達成するために収入を再分配する企ては、資本主義の論理を否定する。その特性に従って、資本主義は役立つ手段によってどのようにも拡大する。資本主義の理論の拡大の偶像礼拝はそのようにして進む。

アメリカのような資本主義の発展した国においては、（社会的アガペーのような）倫理的な動機は、行政の政策にほとんど影響しない。彼らの覇権的帝国主義と世界への優越意識は、極端なほどの自己追及に向かっている。実際、彼らの経済的、政治的主張はこれを否定するだろうが、公然と、止むことなく卑屈にも、巧みにその市場に、いわゆる「自由市場」に供しながら、その政策は経済的財政的市場を操り続けるだろう。その最も狡猾な点は、資本主義の成功が社会的なアガペーの理解を骨抜きにすることにあるという点である。Leech は、「虚構の資本主義」について、十分な資本が法的に蓄積されない時、それ

が生じると言う。そのような「虚構の資本主義」は、ほとんど、あるいは全く力を出さず、必要な資本を社会から奪い取ることによって蓄えることを目的とする。マルクスは、早い時期にこの可能性を論じ、農耕生産者/農夫の、大地からの没収は、資本蓄積の前進の土台であると語った。実際、この手の「虚構の資本主義」は21世紀の新自由主義グローバルリズムの共通の要素になった。マルクスは確かに先を見て、「余剰な労働人口」を予告した。現在我々は、そのような「余剰の労働者」を特にグローバルな南世界に見るが、そこでは何億人もが、闇の労働市場、「産業のない都会」という悲劇図の中で、かろうじて生きていることを知っている。まさにここにおいて、我々は資本主義に固有な矛盾を見出す。すなわち、それは賃金を引き下げておくことで、余剰価値が、生産がより高いレベルにあっても増加し、その逆、労働者が生産されたすべての日常品を消費するには過剰すぎ、不可能さをさらに増加させる。マルクスの予見的論理的分析の実際上の完遂は、人間のこのすべてに関する分野の議論において Zizek により明瞭に説明されている。すなわち、経済的に言えば、技術のゆえに、世界中の多くの人々が、極めて単純に、有り余っている。彼らは生産者として余剰であるだけでなく、商品を購入するにはあまりにも貧し過ぎるので、もはや消費者ではない。未来の経済に関して経済学者の多くは、「20%の人々は職を持っているが、80%の人たちは無職になる」と語っている。いわば、人口の80%もの人々が経済的にも社会的にも意味のない存在になってしまった。資本の蓄積は小作人の奪取を基盤としている。「貧困の蓄積は蓄財の必要不可欠な状態である」とマルクスが説いた通りである。社会的アガペーの意識を伴う倫理的な問題に対して本質的な拒否を示す資本主義のロジックゆえに、(仕事を失い、手が空いている労働者である)80%の人々が個人的、かつ社会的な疎外に苦しみ、生活の糧を奪い取られてしまう苦しみといった屈辱に苛まれている。このような人々は、大量殺人のレベルにも値する構造的な暴力の犠牲者となっている。

このような人間性を疎外された犠牲者の前に対峙しているものは、社会と政治にまつわる四つの現実ががっちりと組み合わさった事柄である。第一に、北米自由貿易協定(NAFTA)のような貿易協定である。これは、この協定によって利益を得て、変わることがない、潤沢な資金を持つ多国籍企業によって生み出されるものである。第二に、貧しい国を差別する取引上の補助金である。第三は、貧しい人々の犠牲によって成立している富裕層を保護する国際法である。第四に、新しい貿易協定による追放される小作人らを配慮するために、多くの製造業の職を生み出す約束を守らなかった豊かな国々と会社の失敗である。実際、私たちはある意味では、社会的・アガペーを全く間違って使っていると述べ



ることができる。資本主義のロジックに従えば、貧しい者ではなく、金を持っている人が祝福される。さらに、祝福は貧しい人たちの犠牲によって富裕層に与えられる。資金があり、力のある者にとって、責任は問題にならない。特権階級はシステムの不公平さを認めているようには見えない。さらに、資本主義を活気づけ続ける冷酷なロジックを起因とする苦しみに対して、彼らは自責の念を示すこともしていない。いうまでもなく、南の発展途上国において人間の搾取をかきたてる自己を強化し続けるモチベーションは、社会的アガペーの反対に位置する。

社会的アガペーの影響を受けることなく企画され、実行へと移される政策の計画的な性質を見ることを通して、資本主義のあからさまな搾取の性格の狡猾極まりない姿を、はっきりと認めることができる。貿易政策の策定に従った農業関連産業によって行われる支配は、実際のところ新しい現象ではないと Leech はその著作のなかで説明している。それにもかかわらず、1990年代半ばに世界貿易機構（WTO）が創設された際、アメリカとEUは、北側諸国にある農業の企業のために農業補助金を主張する巨大なアグリビジネスへの特別な恩恵を拡大する自由貿易主義のドクトリンをはっきりと反対した。たとえば、翌年の収穫高を上げるために一年の収穫を蓄えておく種を使用する農家を防ぐ法律は可決された。種を売る会社は、農家に自分たちが生産した種を買い、使ってもらうことを求めているため、このような農家たちの「種の自由」を妨害した。種を生産する会社は種を実質的に変えてしまった。このプロセスを通して、種が新しい種を生み出す能力をブロックさせた。そして、種の法的地位は変化し、会社によって生産される種は、この会社の特許を認められた資産となった。結局、農家は会社の種を買うことを強制され、法律上の問題は、知的所有権の問題になった。つまり、農業関連産業は、改造され、利益を生み出す種をめぐる特権を法的に獲得できた。もちろん、種を成長させるために多くの時間と労力を費やした、何世代にもわたる農家たちの知識の投入に関わらず、このことから小作人である農家は、なにひとつ報酬を受け取っていない。

一般的にあって、会社は自身の行動と政策による構造的な暴力を認めることを拒否する。この管理された沈黙の陰謀は、構造的、財政的に、そして法的に実によく洗練されている。極めて見せかけのものにもかかわらず、このような陰謀は資本のロジックの通常の活動として認められなければならない。たとえば、国際貿易と財産権は一般的に、本来、資本の蓄積の必要性があるゆえにつくられる。さらにまた、これらの権利が実施される時、私たちが最近になって南の発展途上国で見てきたように、この法律自体が構造的な暴力を恒常化させるものになりえる。このことは、新自由主義によるグローバリゼーションの特有の構

造のなかで特に明らかになり得る。しばしば、このような構造は伝統的で自由な市場の考え方を単純に無視し、その変わりとして、資本のロジックの求めに応じて好んで働く。もし、資本の蓄積が必要であるならば、会社は自由市場の伝統的な信条を嬉々として背くであろう。問題が起きたときに、自由主義の民主的な政府は介入するかもしれない。しかし、このような介入自体がほとんど常に資本のロジックに導かれていく。

社会的、政治的構造をめぐる資本の破壊的な効果に関する Leech の評価は、社会的アガペーを意識することで統計の解釈までもいかに変わってくるかという良い例となる。Patrick McDonald を引用しつつ、Leech はレトリックを用いて問いだす。「一人の子どもの死は悲劇になるが、なぜ数百万人の死が単なる統計に過ぎないのだろうか？」そして「三秒ごとに今しがた始まったばかりの一人の人間の命は残酷にも失われ、同じく三秒ごとに120,000ドルが全世界中の軍勢力として使われている。」これらのわずかな、洞察に満ちた見解は、なぜ、アメリカ人と西側諸国の人々は、アメリカの帝国主義の奇怪な行動に慣れてしまったのか、そして、政府がアメリカの経済と軍事的要求に好意を示していない外国人を大量に虐殺する許しがたい行動に慣れたのかということについて、問題の核心を指し示す。それゆえ、元経済政策担当の財務次官補であった Paul Craig Roberts はアメリカの大部分の主要報道機関は、政府によって発表され、繰り返されるプロパガンダとほとんど大差ない報道しかしていないと度々、指摘している。その結果、アメリカ人は拷問、暗殺、殺人、(ある地域限定された、または国際的な)器物損壊など、アメリカの政策かまたはアメリカ政府が実行している地域や人間に及ぼす影響に関して批判的な評価をほとんど聞かされていない。事実、これらの行いはよく知られているが、最近、Gerald Celente が「American prostitutes」として言及しているメディアにおいて、これらの行いを対象とした批判的なレポートはめったにない。その一方、社会的・アガペーは、真実と透明性を力づけるものである。しかしながら、アメリカ政府はニュースメディアを操ることによって、そのもっとも憎むべき活動の恐ろしい現実を見えなくさせているために、多くのアメリカ国民はこの現実の深刻な性質に対して無感覚なままであり、それらを痛ましいが必要不可欠なものであり、我慢することができる悪と見なしている。

この政府による隠ぺいの問題は、より複雑な事柄が起こった際にさらに問題を深刻にする。たとえば、緊縮経済計画に従うかどうかという被援助国(つまり国)の意思を条件とされる食料援助の問題です。ある意味、システム全体の拷問のようなもの」と記している)。さらに、製薬製品の生産と不公平な配布があり、政治的、及び軍事的理由による商品と食糧の制裁がある。また、一般人の殺

害が加速していることもあげられる。彼らの不正義は確かだと思われるが、これらのすべての非道な行いは、複雑さがからみあったものななかで見失われる。その複雑さの特徴は、ハンナ・アーレントが悪の陳腐さ、そしてその冷酷さそのものを管理された殺人として言及したようなことである。Walden Belloは世界銀行（WB）、国際通貨基金（IMF）と世界貿易機関（WTO）のような西洋世界の巨大な援助団体は実際、発展途上国における自立を挫こうとしていると指摘している。その代わりに、彼らは、途上国の小さな農民の小規模な生産拠点を破壊させ、西洋の企業だけ利益を得るアグリビジネスからの食糧輸入を促進することを選ぶ。資本主義のロジックに従えば、食料はそれを食べる人たちのところに向かい、彼らの貪欲な食欲の多さがどれほどのものであってもそれを望むと、Leechは明瞭に論じる。

資本主義のロジックの危険極まりない熱心さは、市場においていっそうのこと明確に姿を現し、すべてを合わせて「Big Pharma」として知られている巨大な西洋の製薬企業の利益を集中させる。巨大な製薬企業は株主（つまり利益）の収益に集中し、製薬企業の薬を必要とする患者の体調は会社の生産計画より低い価値しかもたない。はっきり言えば、Big Pharmaは金持ちだろうか、貧しい人だろうか、多くの人にとって最も必要な薬よりも、多くの利益をもたらすと予想される薬に関心を持つ。実際的に述べれば、このことは「ライフスタイル」の薬（バイアグラなどの精力強化剤）は、生命を脅かす病気と闘うことに使用される薬の生産よりも、より優先されることを意味する。ライフスタイルの薬は巨大な利益をもたらすことを意味している。しかし、貧しい人たちに必要とされる薬の場合はそうではない。それどころか、貧しい人ために使われる薬の生産は、無駄な努力と見られている。製薬会社の高額な薬を貧しい人々が買うことができないからである。

これは人間が求めるものより利益の方が重要であると考える資本主義、社会・経済システムの内側のロジックである。製薬会社が生産や配布するための薬よりも、市場で取引する薬を販売することなど何の価値もない。Leechによれば、2004年に製薬会社は、研究や開発のために31.5億ドル以上も費用を費やしたが、マーケティングのためには57.5億ドルもの費用を費やした。会社の財政的政策立案においては、社会的アガペーの意識の影響を受けることはなく、人間が求めることよりも財政的利益の方が優っているのは全く驚くべきことではない。さらにまた、資本のロジックは、貧しいアフリカの一つのグループが試薬テストのプログラムに進んで参加するような、独自のアイロニーを生み出す。不幸なことに、この大変なプログラムを終えて、試薬テストで使用された薬が通常の市場価格で売られた時に、その同じ薬を買う余裕は全くなかったことに気づく。「Big Pharma」は

資本のロジックの前に卑屈にも追従している。彼らの絶対視された偶像と最終的な目的はいつも、財政的な利益を最大にすることにあります。

おそらく、社会的アガペーが導き手のために必要な、最もはっきりとした例は、アメリカの国防支出によって生じる人間性の搾取のランク、または Paul Street が「国の魂のない軍事支出」と的確に評しているものである。合衆国連邦政府の自由裁量による支出総額の半分以上が、合衆国の防衛費に、いや、もっと正確に言えば、軍事費に当てられる。また別の言い方をすれば、合衆国連邦政府の自由裁量による支出総額の半分以上が、人間を殺すことに、また、出来るだけ効果的にそれを実行することに関連する諸々の準備に充当される。軍事費が徐々に減額されるだけで、合衆国の経済が崩壊しかねないくらいに、この事実が合衆国の資本主義に強固に根づいている。アメリカの資本主義は合衆国の軍事費を必要としている。これは不安定かつ危険な状況である。広く世間で認められているように、実に頻繁にそのように理解されてきた。1950年代に、アイゼンハワー大統領は、合衆国の経済と社会生活を支配する脅威となり、巨大化して、手に負えなくなった「軍事産業の複合体」に対し、警鐘を鳴らした。アイゼンハワーが、当時、彼が論じたその複合体が合衆国の生活と政治を支配するようになる、とまで想定していたかどうか、わたしは疑う。実際に、1960年代後半に、ベトナムでの合衆国の戦争への経済支出によって、飢餓に対する合衆国の戦争や十年間で飢餓を撲滅する政府計画や、「全アメリカ国民のための自由経費 (Freedom Budget for All Americans)」は機能不全になった。

アメリカの軍事費の背後に潜む諸々の目的は破壊的なものである。つまり、それらは人間の発展に、ほとんど、あるいはまったく無関係である。他の諸国の繁栄に触れた表現はプロパガンダ (宣伝文句) にすぎない。軍隊派遣に対して公的かつ法的な支持を得るために、そうしたプロパガンダが使用され、軍隊の派遣によって、短期間で、合衆国に資本の蓄積が増加し、そして、現職の政治家たちを再選させかねないという一種の不安感を増進した。ストリートが指摘しているとおりに、軍事産業複合体の目的は、三層構造になっている。第一に、軍事産業複合体は「地球的な国家資本家による帝国 (the global state-capitalist empire) の維持」を追求する。第二に、軍事産業複合体は、ハイテク技術の軍事部隊に共同の福利の提供を追求する。第三に、軍事産業複合体は、公的に資金融資を受けた国内経済の刺激とは逆累進の枠組みの供給を追及する。このような刺激が「軍事ケインズ主義」と言及されることが、よくある。(この刺激の不安定な目的は、かなりの平等主義的で、社会-民主主義的な福利状態、また、活気があり人気のある公的部門、つまり合衆国における「社会ケインズ主義」を、予め封じる (pre-empt) ことである。)

社会的な諸政策を強引に押し進める役割に加えて、人文主義的な方面では、社会的なアガペーの意味は、資本主義のような制度は改革され得るのか、あるいは、資本主義のような制度は取り替えられなければならないのか、といった、よりいっそう抜本的な問題点を明らかにする。ひとりのクリスチャンとして、わたしはこの問題に、しかもこの問題と聖書の救いの教理との類似点に、興味がある。救いは、人類の罪深い堕落の全体性や、人間の人格の外側から着手される、抜本的な変化の必要性を前提とする。伝統的なキリストの意味において、真の救いとは抜本的な変革のことである。つまり、それはこれまでの（罪に満ちた）生き方を、完全に拒絶することなのである。救いとは、自己改革の一過程ではない。救いは、わがままでなくなった結果でも、もっと楽しくなることでもなければ、名前だけのキリスト教でもない。そうではなく、逆に、聖書の救いは、人間の本性をまったくガラリと変える、神の霊の働きである。

最近、経済の記者たちの多くが、改革される余地のないシステムとして、資本主義を批判的に見るようになってきた。要するに、資本主義のシステムは、特権を持つ少数者の経済的な利益を増やすことに照準を合わせるシステムとは対照的に、人間全体を益することに照準を当てているシステムに、完全に (*in toto*) 切り替えられる必要がある、と彼らは指摘している。たとえば、富の再分配といった仕組みを利用するなど、資本を「人間化」するための試みは無駄になる。なぜなら、そのような試みは資本の論理と矛盾するからである。資本システムの社会的・経済的構造は、通常通りに機能し、しかも、貧困層の必要性よりも富裕層の欲求に奉仕すべく、不均衡に機能する。こうした構造が、不平等の原因となり、しかも、不平等が、システムによって辺境に押し出された人々の間に苦しみをもたらす原因となる。リーチやメスザロスのような経済評論家にとって、現在の資本システムは変わりようがない。ジョエル・コヴェルは、社会的アガペーの強烈な意味を明示する批判文書で、資本主義の手におえない諸問題に照明を当て、彼は人間が直面している、資本主義の言葉で言う「冷酷な窃取 (the cold abstractions)」について、次のように述べる。

なぜなら、金銭はすべて「統計 (counts)」であって、特有の冷徹さが資本家たちを特徴づけ、人類、大陸全体（すなわち、アフリカ大陸）または、余剰価値の大きな進展にほとんど関係のないような不都合な人口集合体（すなわち、都市部で生活する黒人男子）を犠牲にするタフな精神と冷酷な窃取をもつ。価値の存在は、本物の仲間意識、あるいは共感を排除し、利益の拡張の計算論法によって置き換えられる。ホロコーストがそれほどまでに非人道的に実行されたことなど決してない。



「社会的アガペー」の強烈な意味は、資本主義の別の悲劇的な局面を明らかにすることができる。つまり、不平等は、単に経済的な資源を分配するという問題ではない。それどころか、具体的には、気候変動による有害な結果が、世界中で不平等に広がっている。西洋世界による土地や空気や水の汚染がもたらした結果を、不平等にも貧しい諸国が被っている。経済の発展は、反エコロジー（反環境保護的）であり、また同時に、生かされているという意味における人間の生命に対し、無関心である。資本主義の特殊な焦点は、利益を増やし続けるという究極的な目的で、交換価値に即して、利益を生むことにある。諸々の社会は、資本主義の仕組みや政策を通して、そこに潜む構造的な悪やジェノサイド（組織的大量虐殺）に、それらが将来の世代に影響を及ぼすことになるとうのに、ほとんど（あるいはまったく）関心を向けることをしないまま、商品化され、搾取されている。将来の世代は、こうした商品化や搾取に気づくことになるであろう。

幾年にわたって作り出されたその問題のあまりの大きさゆえに、政治的な経済に方針を定める現在の資本主義に取って代わる革命的な対案が求められている。資本主義を「人間化」する試みは、まるで沈みゆくタイタニック号の上でデッキ・チェアを並べ直そうとするようなものである。つまり、そうした試みは、良かれと思ってのことではあっても、資本主義のシステムのジェノサイド（大量虐殺）的な本性のゆえに、人々が直面する根本的な諸問題を処理することにはならない。私たちに必要なのは、「社会的アガペー」の自覚によって喚起される社会を、抜本的に再構築することである。そのような再構築が、人間の必要性に優先順位を与えることであろう。しかし、この局面の抜本的な再構築は資本主義の論理によって誘導された人々から声高に反対されるだろうということを、最初から想定しておくべきだということを、わたしは付け加えておきたい。

代表的な民主主義には、この種の再構築の媒体になれるような潜在能力はほとんどない。実際に、代表的な民主主義は、資本家が優位に立つための、最も重要な手段の一つになっている。共産主義のスターリン主義的脚色のように、西洋諸国の代表的な民主主義は、旧約聖書中のダニエル書に登場するベルシャツアル王のごとく、「天秤で重さを測り、不足を見つけ出す」のである。より好感が得られそうな代案は、社会の財源は人々の求めを満たすために用いられるべきである、というアラン・マスの素朴なアイデアによって指摘されたような、正真正銘の社会主義かもしれない。マイケル・レボウィッツは、人間の発展の論理を資本主義の論理に置き換える問題として、社会主義への移行について、論理的に言及する（レボウィッツの言う人間の発展の理論が強い影響を与えるその根本的な要素は、社会的アガペーの感性として、わたしたちが語ってきたことと非常によく似たものと思わ

れる)。レボウィッツの言うところの人間の発展の理論（わたしたちが言うところの社会的アガペー）は、ハンナ・アーレントが「行政的殺戮」と呼んだ大量虐殺行為のようなものに終止符をもたらす得る行政システムの倫理にとって、その基礎の役割を担えるであろう。このように、ただ完全に組織化された再構築だけが、富める者の利益のために貧しい者を搾取するという実に根深い実践から、世界経済を解放する可能性を秘めている。資本主義システムをそのように革命的に置き換えることだけが、富める者や権力者に不適切に財源が迂回されるのを抑止し、そして、合法的に貧しい者から彼らの土地を盗み取るような搾取を抑止することができるのではないだろうか。

わたしは最初に説明しておきましたが、社会的アガペーというのは一つの感性以上のものである。事実、それは意志に基づく新規構想であって、入念な調査と評価による継続的な結果からもたらされたものである。もし、わたしがそのアイデアを軽視することなくそうできたなら、社会的アガペーを、洗練されたアガペーとして言葉にしたい誘惑に、わたしは駆られていたであろう。わたしが言及した社会的アガペーとは、まぎれもなく、人間の幸福や平等といった諸問題には無関心であることを絶えず自ら証明してきた（資本主義のような）大きな制度に対し、批判的に照明を当て、徐々に廃止していくための、妥協のない動機付けとして理解されるべきである。キリスト教徒たちは、信仰生活、礼拝、キリスト教的な生き方などを通して、アガペーについて学び、かつ経験してきた。しかしながら、彼らは、社会というレベルでは、平和や善意をもたらす、そしてすべての人に対する平等を保持するために、アガペーの潜在能力の表面部分をかろうじてかすったにすぎない。資本主義のような、人間を破壊し続ける巨大なシステムを脱構築する批判的作業が完遂されるまで、そうしたことが起こることはないであろう。この広く社会的かつ世俗的な意味で考察する時、自分たちが人間であるというただそれだけの単純な理由から、すべての人が繁栄することができ、そして平等な扱いと平等な機会のもとでお互いに関わり合うことができる世界を生み出そうとの目的のために、それぞれ異なる政治的また宗教的な信念を持つ人々を一つに結び合わせる潜在能力が、社会的アガペーの自覚にはある。聖書の預言者たちは、シャローム（平安）の時と場として、そのような世界について言及したのである。同じ様に、わたしたちの将来のビジョンも、そのようなものになることを深く願っている。